

『面白くて やがてかなしき ～スイス・アルプス再訪～』

「これが最後になりました」

アラリンホルン、メンヒ、手も足もでなかったユングフラウ

2017 年 7 月 岳友アカさんと 2 人 弥次喜多道中記



（観光客で賑わうクライネ・シャイデック駅からメンヒ（左）を望む。今回登ったルートは紙面裏側の南東稜。

右は今回のメインターゲットであったユングフラウ峰）

・・・メンヒ南東稜の岩場をアンザイレンしてウンウン・ヒーヒー言いながら、時にコンテ確保で、また時にスタカット確保で登り始めて既に 3 時間が経過。やっと岩稜帯の中間部にある雨量計まで達して、メンヒ・ヨッホ小屋やユングフラウ・ヨッホからメンヒ・ヨッホ小屋に至る雪原、またアレッチ氷河源頭のユングフラウ・フィルン(固形化雪原)などもかなり下方に見えるようになってきたが、標準コースタイムでは、この時間には山頂まで到着しているはずである。事実、我々は後続の何パーティーかには全て抜かれたが、我々が抜いたパーティーは 1 パーティーも無かった。マ、彼らのパーティーはガイドに連れられた若者パーティーであったから、ガイドレスの我が後期高齢パーティーが彼らに及ばないのは、これは理の当然なのではあるが・・・。

これから上には、未だ未だミックスの岩稜帯が続き、岩稜が終わった所からは今度は馬の背の急峻な雪稜が山頂迄続いている。先日グリンデルワルトの登山センターでルート状況を聞いた折、居合わせたスイス人ガイドも、“この馬の背雪稜は足の幅がやっとで、かつ、両側は一気に 500～1000m 切れ落ちた絶壁になっている。花魁歩きよろしく交互に左右の足を一直線上の線の前に繰り出すしかない。貴方らはガイドレスでもあり、聞けば歳も 75 歳ということであるから、南東稜の取付から山頂まで往復するのに通常のコースタイムの倍近くの時間（約 10 時間）は掛かるであろう。さすれば、当日朝の登山電車でグリンデルワルトを出発していたのでは日が暮れてしまう。前夜にメンヒ・ヨッホ小屋に泊まって翌早朝の早い時間に出発しなければ登頂はおぼつかない。マ、どうみてもこの歳でガイドレスで登ろうなどと言うのは、気違い沙汰もよいところである。ガイドを付けることを強く推奨する。ここには優秀なガイドが山ほどいる、云々カンヌン・・・”と呆れ顔でノタマッタのであった。

この調子で行けば、たとえ山頂まで登り着けたとしても、登りより格段に難しい下山が暗くなってからになってしまう。おまけに黒雲が広がって来て霰も降り出した。ここ数日は、朝は好天であるが、午後には雷雲が広がって夕立が来るという天気のパターンが続いている。里は夕立でも山は雪になる。今日も同様な天気であろう。

ユングフラウは五里霧中で全く見えず、かろうじて見えていたユングフラウ・ヨッホの展望スフィンクスも雲に隠れてしまった。もしホワイトアウトになってしまえば、馬の背雪稜や急峻な南東稜を安全に下れる自信は全く無い。仮に下れたとしても、全てスタカットでの確保が必要になるであろうから、下山に相当の時間を要して、その結果、真っ暗闇の中をヨロヨロと下っていると足を滑らして奈落の底に墜落すること必至であろう。(帰国してから知ったのであるが、事実この日にこのメンヒで日本人2人が同じ南東稜コースから南壁に滑落死するという遭難事故が発生していた)。

という次第で、南東稜途中の雨量計地点でリタイアを決断、3年前の前回に続いて、今回も誠に残念な結果と相成ったが、これがベテランの分別と思いたい。・・・



(残念だが、ここでリタイア。南東稜取付から標高差たったの300m、標高3800m地点。頂上までの標高差300m

中央の凹部に雨量計、その右上の稜線上には2人の人影も見える)

さて、話を発端に戻そう。

3年前にシリウスの欧州アルプス・タソガレ隊の4人でシャモニー、ツェルマット、グリンデルワルトの山々を巡った折に悪天で登り残したメンヒのリベンジを果たしたいと、その時は半ば冗談半分で岳友のアカさんに話したところ、メンヒだけでは勿体ないからユングフラウも併せて纏めてモノにしようではないかと彼も乗り気になってきた。

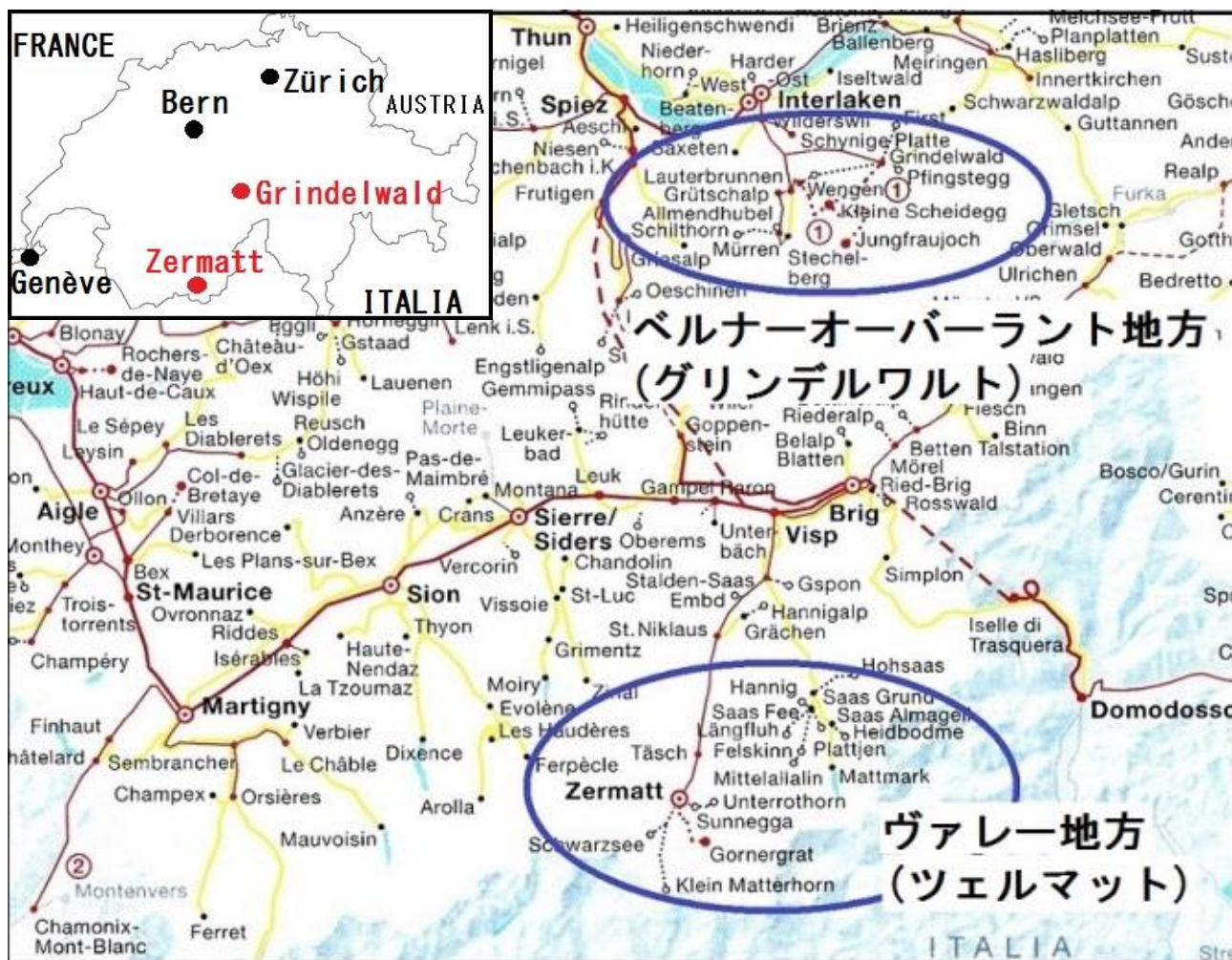
2017年の正月早々から航空券や登山口のホテルの予約、キャンプ場の調査を始めて2月には種々の手配を全て完了、後は登るルートの確認、体力維持と富士山での高所順応のトレーニングを待つばかりとなった。片足1.5kgのマッスルトレーニングシューズを買ってきて自宅から往復2時間の江の島まで歩いたり、富士山には氷河アンザイレンのトレーニングも併せて都合5回ほど登って準備おさおさ怠りなかった(と思いたい)。

ルート確認は、鈴木昇巳編「Rock & Snow Books 海外登山」、リヒャルト・ゲデーケ著島田訳「アルプス4000m峰登山ガイド」、中野融「ヨーロッパ・アルプス登山ハイキング案内」、小森康行「ヨーロッパアルプス」、Hans Grossen「L' OBERLAND BERNOIS LES 100 PLUS BELLES COURSES ET RANDONNÉES」

などのガイドブック、内田陽一著「五十歳からの挑戦 アルプス 4000m峰 36 座登頂」などの他、ホームページに掲載されている各種山行記録も何回も読み返して万全を期したので、登る前からクレバスやセラックの有り場所、ミックス帯の状況、雪のナイフリッジや急斜面のトラバースの様子など、ルートの詳細が全て我が頭に刷り込まれて、眼を瞑ればいつでもどこでもルート上のあれこれをシミュレーションすることが出来るまでになった（と思いたい）。

さて、今回の行程は、アカさんのプランによって現地での足慣らしや高所順応を兼ねてマッターホルンのヘルンリ小屋までのハイキング、普通は減多に足を延ばせないミシャベル山群のアラリンホルン(4027m)の登頂のためにまずツェルマットで3日間ほど足慣らしをしてから今回の主目標であるメンヒ(4107m)やユングフラウ(4158m)の登山口・グリンデルワルトに入る行程とした。以下、主な山行やトレッキングの模様を日程の順番に記しておくこととしたい。何れも世間様にお見せできるような内容ではないが、これからこの山域に入ろうと計画されている方々に少しでも参考になれば幸甚である。

最初に、今回入域したヴァレー地方とベルナーオーバーラント地方の地図を掲げておく。



また、今回の荷姿は、運搬用メイン大型ザック、登攀用アタックザック、合計で 30kg となった。今回はグリンデルワルトではキャンプ場で泊まったので、シュラフやエママット、またロープ2本や登攀ギアなどもあって、機内預け荷物制限重量ギリギリとなった。右写真はツェルマット駅前のホテル・バーンホフに入った時のメインザック（背中）とアタックザック（胸前）の両担ぎの姿である。



本稿での報告は下記の通りである。クリックすればそこにジャンプ。

登攀編

- [1. アラリンホルン登頂](#) (ヴァリス山群/アラリン山群)
- [2. メンヒ 敗退記](#) (ベルナーオーバーラント山群)
- [3. 手も足もでなかったユングフラウ](#) (同)

ハイキング編

- [4. マッターホルン・ヘルンリ小屋往復](#) (ヴァリス山群)
- [5. シルトホルン観光](#) (ベルナーオーバーラント山群)
- [6. グロッセ・シャイデック](#) (同)

ご参考

[スイス・アルプスの山旅のチップス](#) (参考情報)

(本項掲載の写真は、筆者及び相棒・アカさん撮影)

【登攀編】

1. アラリンホルン(4027m)登頂 (7月17日)

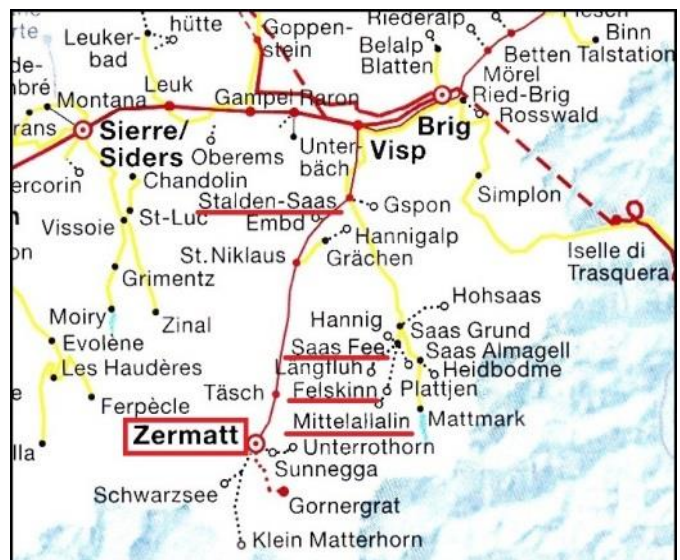
ガイドブックなどによると、アラリンホルン(4027m)はスイス・アルプス 4000m 峰の中では最も易しい山で、一昨年登ったブライトホルン(4164m)よりも更に易しいなどと書かれていたが、実際はクレバスが縦横に走っていたり、クレバスを渡る長いハシゴがあったりで、ガイドレスの我々はそれなりに緊張した。今日は日曜日のせいか登っているパーティーが多かった。自慢ではないが、我々が追い抜いたパーティーは一つも無いが、後続のガイドパーティーにドンドン追い抜かれた。ベテラン夫婦に挟まれてアンザイレンされた幼稚園児か小学校低学年くらいの2人の子供も走るように登っていった。

アラリンホルンは、ツェルマットから見るとフィンデル氷河を挟んでゴルナーグラート山稜と反対側のミシャベル山群(正確にはアラリン山群)に位置しており、登山の基地はザース・フェーである。

ザース・フェーは鉄道は通っておらず、ツェルマットからはシュタルデン・ザースまで鉄道で約1時間下り、そこからポスト・バスに乗り換えてザース溪谷を30分程遡った山奥にあるから、ちょっとアプローチが遠いが、ツェルマットなどの喧噪国際観光地と違って、主にスイス国内の人々が避暑やスキーなどに訪れる静かなリゾート村であった。ツェルマットと同様ガ

ソリン自動車を禁止しているので道路も静かである。バスの車窓から眺めた途中のザース溪谷の景観も峪が深く切れ込んで素晴らしいものだった。

ザース・フェーからはゴンドラに乗ってフェルスキンまで行き、そこからはメトロ・アルピンという地下ケーブルカーでミッテル・アラリンというスキー場まで登れる。ここは標高 3500m であるから、標

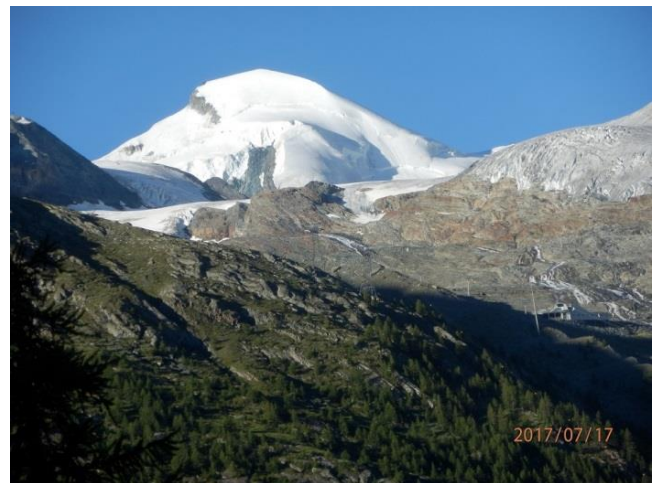


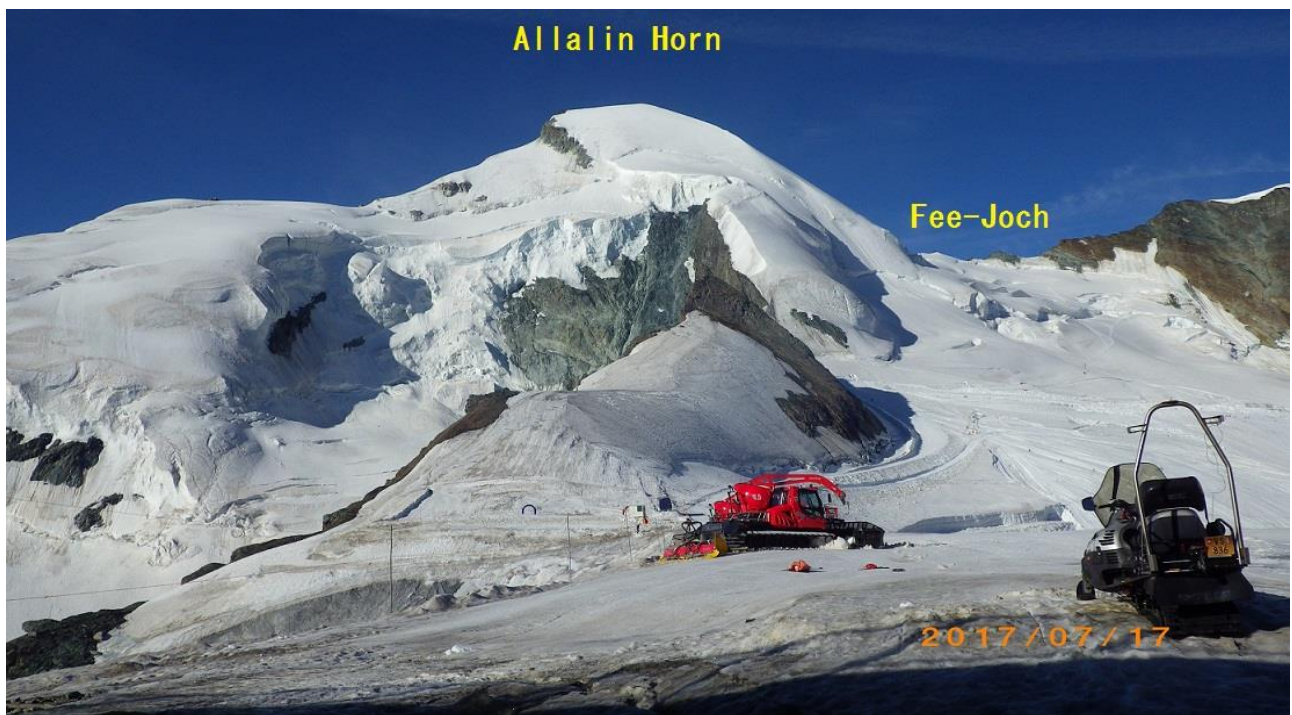
高 1800m のザース・フェーから一気に 1700m 乗り物で稼げる訳である。即ち、ここから標高差 500m 登ればアラリン・ホルン頂上であるからして、「アルプス 4000m 峰登山ガイド」の著者リヒャルト・ゲデーケ先生をして“登山電車の開通によって、アラリン・ホルンはおばあさんの 4000m 峰となった”と嘆かしためたが、実際に登ってみるとなかなかどうしてガイドレスの我々には骨のあるたいした山であった。

ツェルマットを朝一番の電車でシュタルデン・ザースまで下り、そこからポスト・バス（鉄道が通っていない地域を限なくカバーしている黄色なバス。郵便配送も兼ねている）に乗り換えてザース溪谷をザース・フェーまで遡った。ザース溪谷は諸処に牧場などが開かれた長閑な緑の山腹とシャレーが望める景観の地であった。ザース・フェーの村の中を 15 分ほど登って行ってゴンドラの始発に乗る。

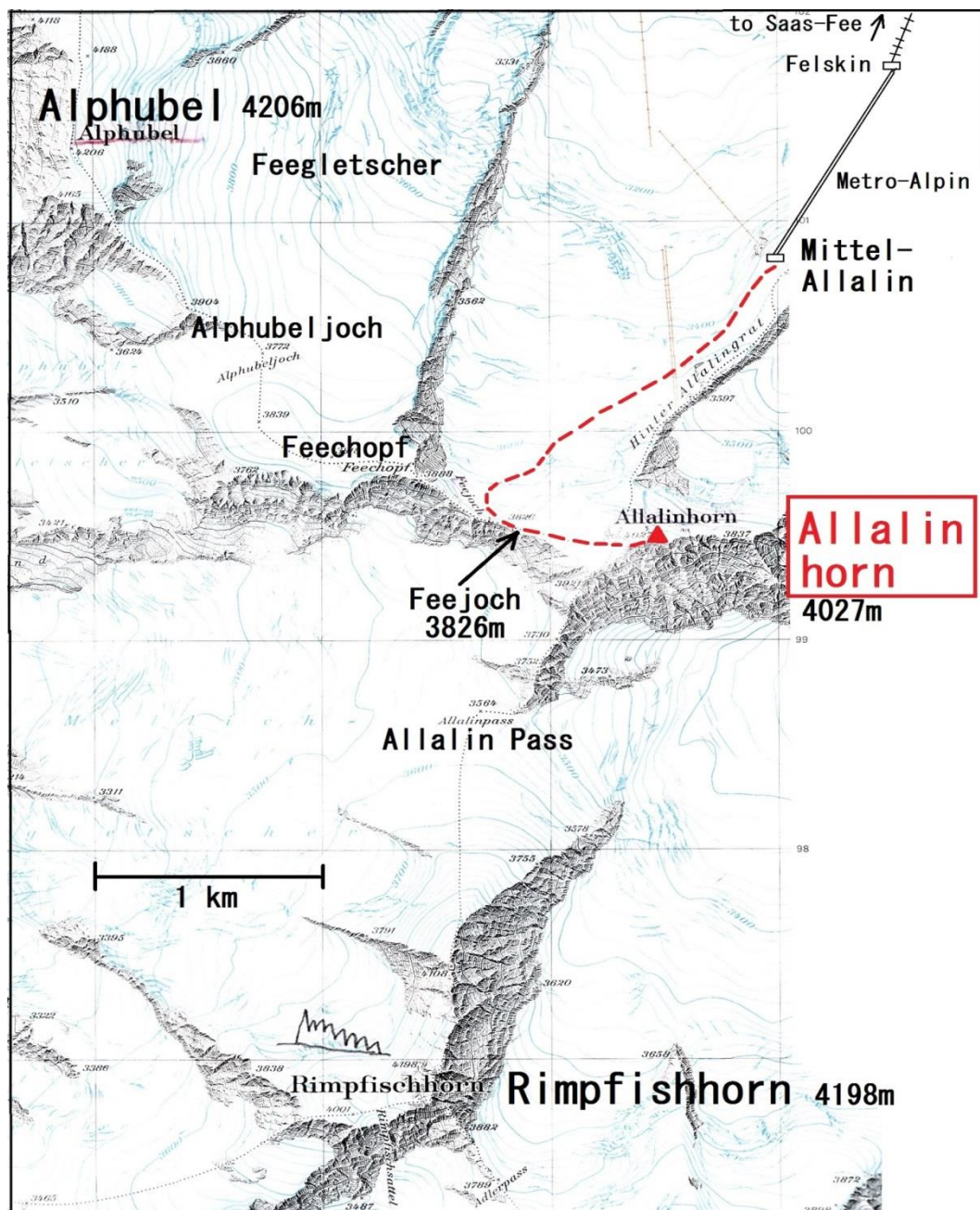
スキー客が主であるが、登山姿の人もチラホラ。目指すアラリン・ホルンがゴンドラの窓から見えてきた（右写真）。真白く雪を被っている。その下方にはズタズタに崩壊した氷河も見える。

途中、フェルスキンで地下ケーブルカーに乗り換えて 10 分でミッテル・アラリンに到着、ここは大きなスキー場になっている。圧雪されたスキー場を横切ってアラリン・ホルンの北斜面に取り付いて、ここでアンザイレン。ぼつぼつクレバスも姿を表わすようになってきた。





(ミッテル・アラリンから望むアラリンホルン。ルートは右に回り込んでフェー・ヨッ経由で頂上へ。重機はスキー場の重機)



後続のパーティーが我々を追い抜いて行く。年配と見受けられるパーティーもあるが、皆さん元気だ。スイス人が多いが、ドイツからの人も居る。段々と大きなクレバスが出てきた。幸いなことに天気が悪くないので彼らが登ったトレースをフォローすればヒドゥン・クレバスに落ち込むことはないと思うが、やはりどこにヒドゥン・クレバスが隠れているか分からないので、先人のトレースを注意深くチェックしながら辿るが、これはかなり神経を使って草臥れる。神経を使うと、その分同時に体力も費消してしまうので余計に疲れることになる。天気が崩れて万が一ホワイトアウトになれば、ガイドレスの我々はこのトレースをキープできなくなって、縦横無尽に走っているクレバスやヒドゥン・クレバスの餌食になるであろうから、絶えず空模様を気を使わなければならないことも疲労を増加させる要因である。

取り付きの直ぐ上に、大きく開いたクレバスに立てかけてある木製の大きな梯子（右写真）が設置されていて、ここのレンジャーであろうか2人の人が梯子の整備をしており、梯子から雪壁に乗り移るルートなどを指示してくれたので助かった。



この重い大梯子をどうやってここまで運んだのであろうか？

このような大きな恐ろしいクレバスがトレースのすぐ傍に潜んでいた



↓これは神が創った造形？

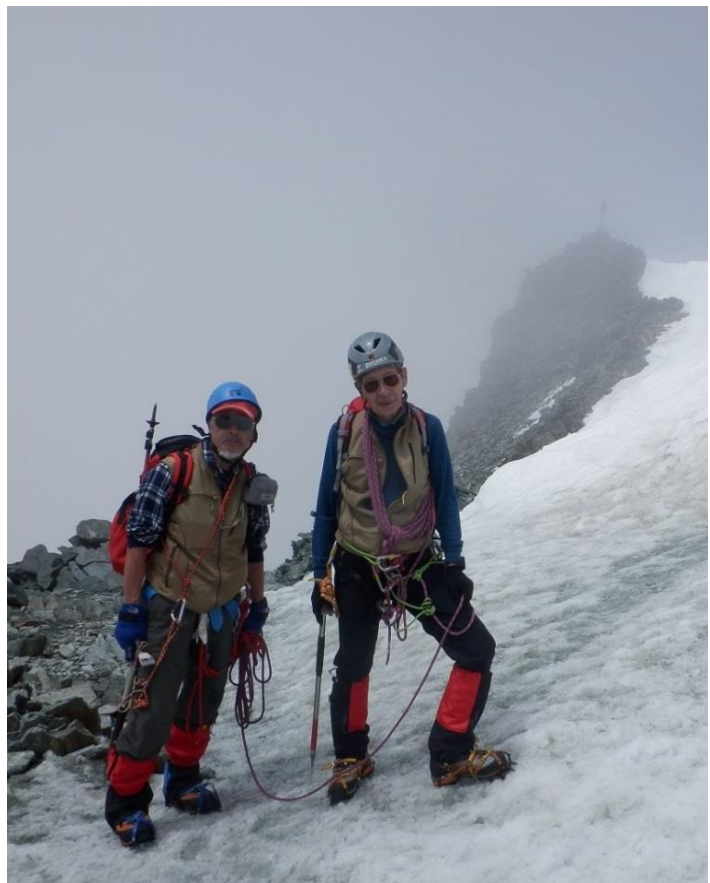




(奥の黒いピラミッドが山頂。ここまで来ると傾斜が多少緩んだように見えるが・・・？)



(山頂直下を登る。後方の尖峰はギザギザという
意味のリンプフィッシュホルン 4199m)



(やっと山頂のプラトーに到着。奥の黒い岩稜が最高点。
山頂の十字架がぼんやりと見える)



(フェーヨフプの山稜を辿る登山者の姿も見えた。フェーヨッホ手前より)

モノの本によれば、アラリンホルンの標準タイムはミッテル・アラリンからの往復で3時間程度だそう。マ、このタイムはガイドパーティーの若者タイムと思いたいが、それにしても、我々は倍以上の時間の7時間かかった。

いくら後期高齢のロートルとはいえ、これでは畏れ入るしかない。モウ、がつくりきて落ち込んでしまった。軽い足慣らしと考えていたアラリンホルンでさえ、この調子では、これから予定の本番のメンヒ登攀、ましてさらに時間が掛かるユングフラウの登攀などは、可能性零パーセントの夢物語でしかない。嗚呼。

クレバスの大梯子まで降りた時に、フェルスキンへ下る地下ケーブルのメトロ・アルピンの下山終発が確か15:30、フェルスキンから麓のザース・フェーへ下るゴンドラの終発も16:00だったことを思い出した。

さすれば、既に終発は発車した後。ここから山麓のザース・フェーまで下山道があるのかどうか分からないが、あったとしても3~4時間くらいは充分に掛かるであろうし、我々には既にその体力も残っていない。仕方ないので、この駅舎の軒下でもツェルトを被って夜を明かすしかないが、標高3500mでのビヴァークは相当堪えるであろうナァ〜。ひょっとして凍死かも・・・。



(アラリンホルン山頂の十字架と)

下のスキー場には既に全く人影が無かったが、圧雪車には人影があるようだったので、とにかく誰かが居る間にと弱り果てた足を叱咤激励して急いで駅舎に下った。ア〜、これは天啓、助かった!! 何と、スキー場の職員を最後に下山させるための職員専用最終下山ケーブルが我々を待っていてくれたのであった。職員は下山路を下っている我々をウォッチしてくれていてケーブルカーの発車時刻を遅らせてくれたのである。他国での親切が身に染みて涙目になり彼等に心の中で何回も頭を下げたのであった。

本項の最後に、今回登ったルートを掲げておく。ただ、積雪の多寡、氷河の消長によっては、クレバス周辺のルートが毎年同じとは限らないことにご注意頂きたい。

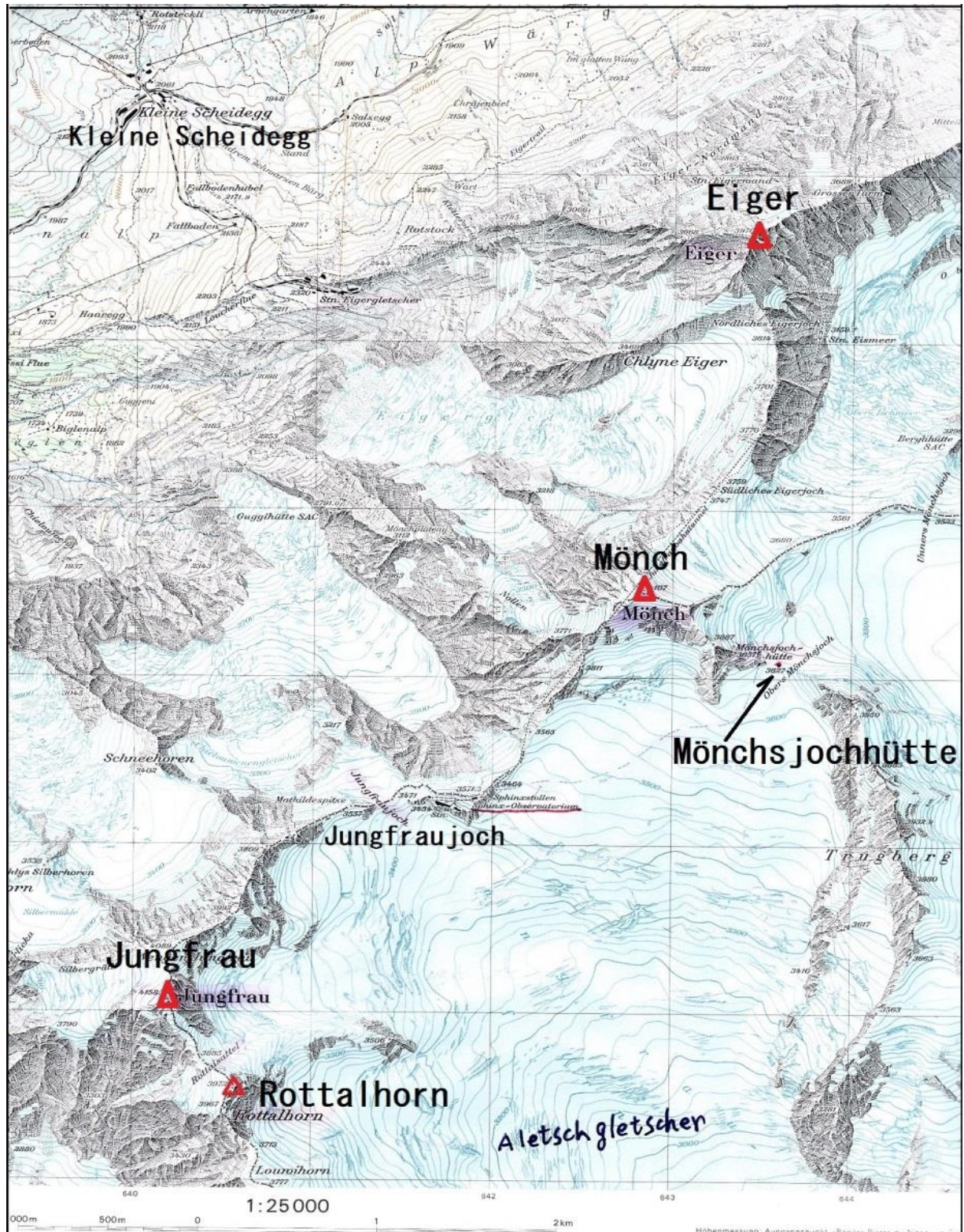


(アラリンホルンの巻 完)

2. メンヒ (4107m) 敗退記 (7月21日)



(クライネ・シャイデック駅からベルナー・オーバーラント3山を望む。左からアイガー、メンヒ、ユングフラウ)



メンヒでのリタイアは冒頭に書いたとおりであるが、ここでは順を追って初めから書く。
アラリンホルンの登攀を終わってから拠点をつエルマットからグリンデルワルトに移し、グリンデルワルトの一つクライネ・シャイデック寄りのグルント駅の近くのキャンプ場（アイガー・ノルト・ヴァント）にテントを張ったが、グリンデルワルトは天気が芳しくなく夕方になると雷雨が来るパターンとなった。この先2日間は雨模様（山では雪）という天気予報が出ていたので、この2日間はハイキングに使うとして、メンヒとユングフラウの登攀は7月21日から連続2日間で行う日程に変更した。

泊まる山小屋のメンヒスヨッホ・ヒュッテは、早々と2月にインターネットで7月18日泊で予約を掛けていたので、これを変更しなければならないのだが、ハタと困った。持参しているドコモの携帯から小屋の電話番号に掛けるやり方（頭の局番のゼロをどうするとかこうするとか・・・）が分からぬ。仕方がないので、グリンデルワルト駅前にあるツーリストインフォメーションセンターに出掛けて、その老譲にちょっとこの山小屋に電話して予約を変更してくれないかと依頼したら、親切に電話してくれて変更を頼んでくれた。ヨーロッパでもアメリカでも窓口に勤めている老譲はどこでも親切だ。

（帰国してからメールを見たら、山小屋からその日の内にちゃんと小生宛のアドレスに変更了解のメールが入電していた）。

さて、そのような次第で、グリンデルワルト・グルント駅を始発の登山電車に乗り、ユングフラウ駅から1時間弱歩いてメンヒスヨッホ小屋のすぐ手前のメンヒ南東稜の取付に9時半に到着。



（ユングフラウ・フィレンからメンヒを望む。中央の白いピラミッドが頂上。右端の稜線が今回登った南東稜）

当日朝出発の電車組は我々が一番乗りであったと思うが、前夜メンヒスヨッホ小屋宿泊組は早朝に取り付いていたのであろう。彼等のトレースがあった。冒頭にも触れたが、この時間からスタートすれば標準タイムで登れたとしても、頂上到着が13時頃となって、下山時には降雪に遭う公算が大であろう。事実、我々がこの尾根の雨量計の所でリタイした時間には、既に登頂を果たした早出パーティーが何パーティーも下って来ていた。

この岩稜の末端でアンザイレン。後の登山電車で登って来た後続パーティーがドンドン追い抜いて行く。今年は前回に比べて残雪が少なく、取付が下部の急峻なスラブ状の岩稜帯となっていて登りにもホールドが逆層で苦労したが、下山時には滑落を回避するために懸垂で下らねばならなかった。岩稜帯は残雪やベルグラは消えていたのでアイゼンを履かずに済んだが、ザラザラ・ガラガラのガラ場で歩き難く、またアンザイレン・ロープが石を拾って後続のパーティーに落石を落さないように気を遣って草臥れた。体力の減退感もさりながら、最近では神経の消耗感が急増したように感じられるのは、やはり歳の所為かも知れない。情けないことでもあり、困ったことでもある。



(メンヒ南東稜取付点の様子。翌日撮影。岩稜帯にも昨夜降った雪が残っている。皆さんここからアイゼンを装着して登っているので歩き難くそうだった。後方中央の霞んでいる峰がユングフラウ、左のコルがロートタール・ザッテル)

以降のことについては、冒頭にしたとおりである。先日のアラリンホルンと同様、標準コースタイムの倍の時間でしか歩けないのが情けない。どだい足が重くて体が上がらないのだ。最近とみに出てきた布袋腹のせいかも知れない。この部分の余分な目方だけでも 5kg はあるのではないか。この遠征のトレーニングの為に新調したマッスルトレーニングシューズの效能書きには、「1日30分間履くだけで余分な脂肪を燃え尽くせます」とうたってあったが、これは全く効果が無かった。コン畜生メ。

我が会の大先輩Nさんのように、海外遠征が決まると約1年間に亘って毎日綿密なトレーニングを欠かさない、トレーニングの為なら好きな酒も断つという決心がコチトラには全く不足しているのだ。

南東稜の上部は実際に歩いていないので、南東稜から眺めた景色を少し掲げてお茶を濁したい。



(ユングフラウ・ヨッホからメンヒス・ヒュッテに至るブル道を歩く人の姿が小さく見える)



(イザ撤退！相棒アカさんの心中や如何に？
後方はスフィンクス展望台)



(メンヒヨッホ小屋も下方に小さく見える)



(メンヒヨッホ小屋。右奥の白いピラミッドがメンヒ山頂)

スイスで邦人男女死亡 【ジュネーブ＝笹沢教一】スイス中西部ベルン州の警察当局は22日、アルプス山脈のメンヒ（標高4107メートル）で日本人の男性（73）と女性（55）が死亡したと明らかにした。日本の外務省は、2人の氏名などについて「遺族の意向で公表できない」としている。2人は21日午後、登山に向かったまま行方が分からなくなり、ヘリコプターなどによる捜索の結果、22日早朝に遺体が発見された。警察は、南壁から滑落したものとみている。 読売新聞 2017. 07. 24版

(遭難を報じる新聞記事)

補遺

帰国してから知ったのであるが、我々が登ったのと同じ日、同じメンヒ南東稜から南壁に滑落して日本人2人が遭難死した。我々は日本人パーティーには会わなかったが、たぶん登った時間が違っていたのであろう。

メンヒスヨッホ・ヒュッテに泊まった翌朝、早朝からレスキューヘリが飛び回っていたので、遭難があったのではと思っていたが・・・。

どこのどなたか分かりませんが、奇しくも同じ日に同じ山に登っていた同類として心からご冥福をお祈り申し上げます。



(メンヒ敗退の巻 完)

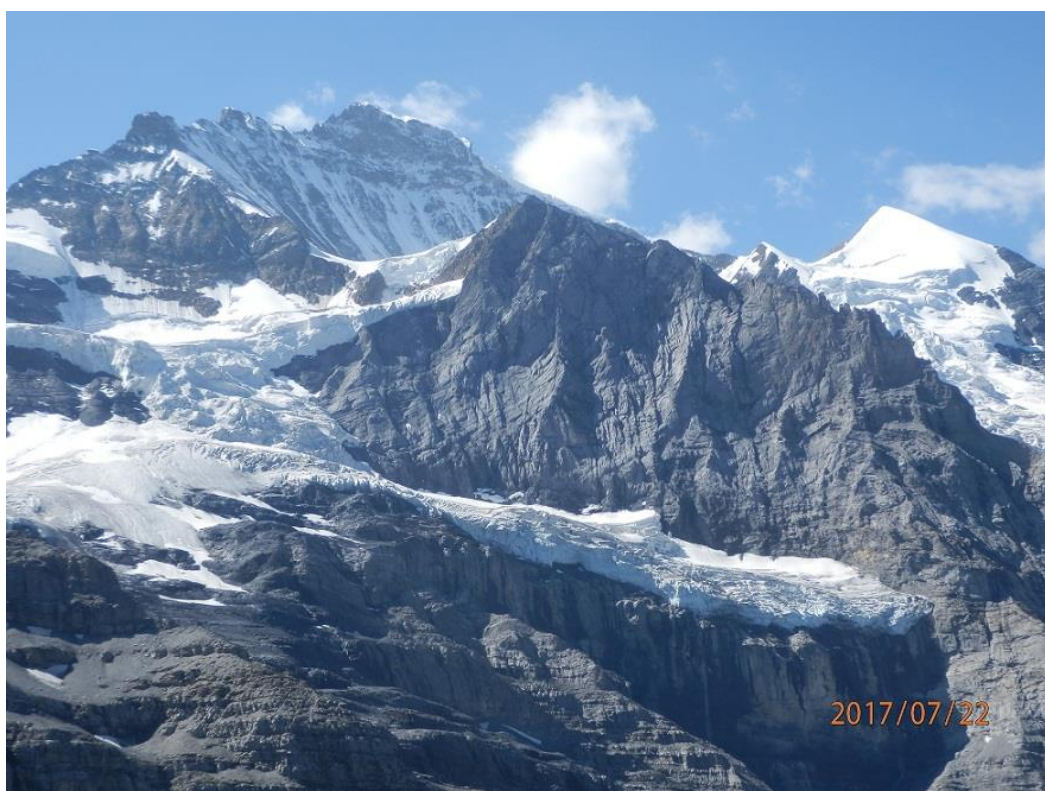
3. 手も足もでなかったユングフラウ (4158m) (7月22日)

実は、今回一番登りたかったのはユングフラウであった。3年前の前回には、この山はもともとターゲットに入れてなかったが、ユングフラウ・フィルンから見たこの山の優美な姿に魅せられた。Jungfrau とは“若き貴婦人”という意味で、なるほど長いスカートの模裾を纏った貴婦人の姿を彷彿とさせる。ユングフラウの隣のメンヒ Mönch は“苦行僧”という意味であるが、なるほどメンヒのゴツゴツした岩稜に比べて、ユングフラウの優雅な雪稜は、高貴な婦人の姿であろう。下の写真は前回行った折に相棒のアカさんが撮影した写真であるが、私はこの写真をパソコンのデスクトップの背景写真に入れて毎日その貴婦人に恋焦がれてきた。ユングフラウ・フィルンから眺めるこの双耳峰の優雅なことは例えようも無い。一方、2枚目は裏側のクライネ・シャイデックからユングフラウの北面を望んだ写真であるが、南面の優美な姿と異なり、北壁の壮絶な景観となっている。



↑
ユングフラウ・
フィルンから
南面

クライネ・ ⇒
シャイデックから
北面



さて、前夜泊まったメンヒスヨッホ小屋の朝食は、早発組が午前3時、遅発組が午前6時となっている。早発組は大体はユングフラウ狙いのパーティーである。我々も先般のアラリンホルン、昨日のメンヒの登頂時間の実績からユングフラウに登れる自信は半ば崩れ去っていたが、それでも午前3時頃起きて空を見上げた。星は全く見えず、濃いガスが漂っていて雪も降っていた。これを良い免罪符として、取りあえずは朝まで空模様を見ることとした。朝6時頃には太陽も照り出して、空も明るくなってきたが、ユングフラウは相変わらずガスの中に隠れて見えなかった。我々の体力では、仮に標準タイム(往復8時間)の1.5倍で登れたとしても、下山が夕方遅くになってしまう。ここ数日間は夕方には必ず雷雨があるので、下山時には降雪でホワイトアウトになっている公算が大きい。

ユングフラウは、山頂からの下山ルートが急峻な雪壁で悪天の場合には懸垂の繰り返しで降りなければならず、またガイドレスの我々はヒドゥン・クレバスに墜ち込む危険性も大きい。また、降雪直後は、ザッテル直下の急斜面で雪崩が出る確率が大きい。

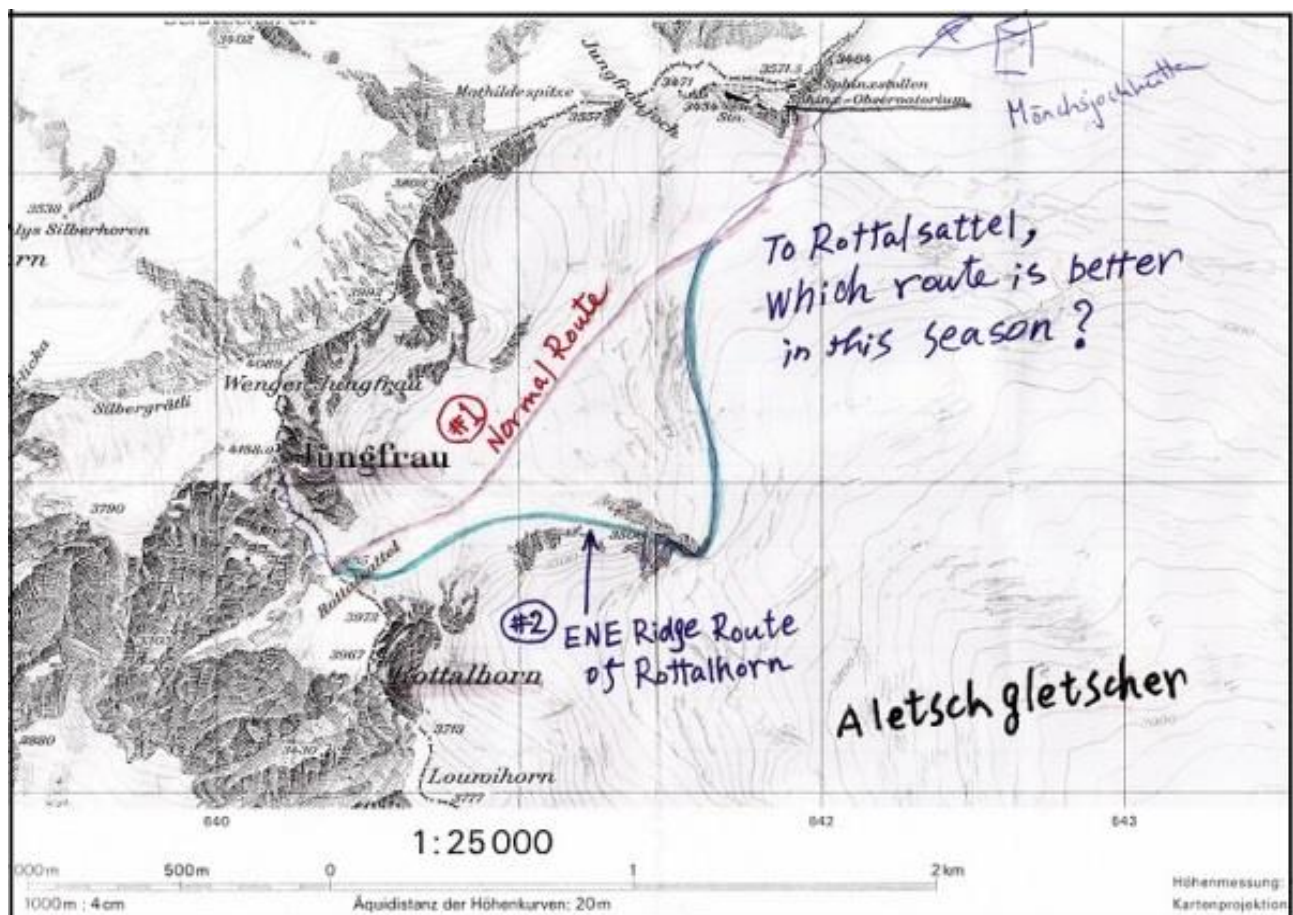
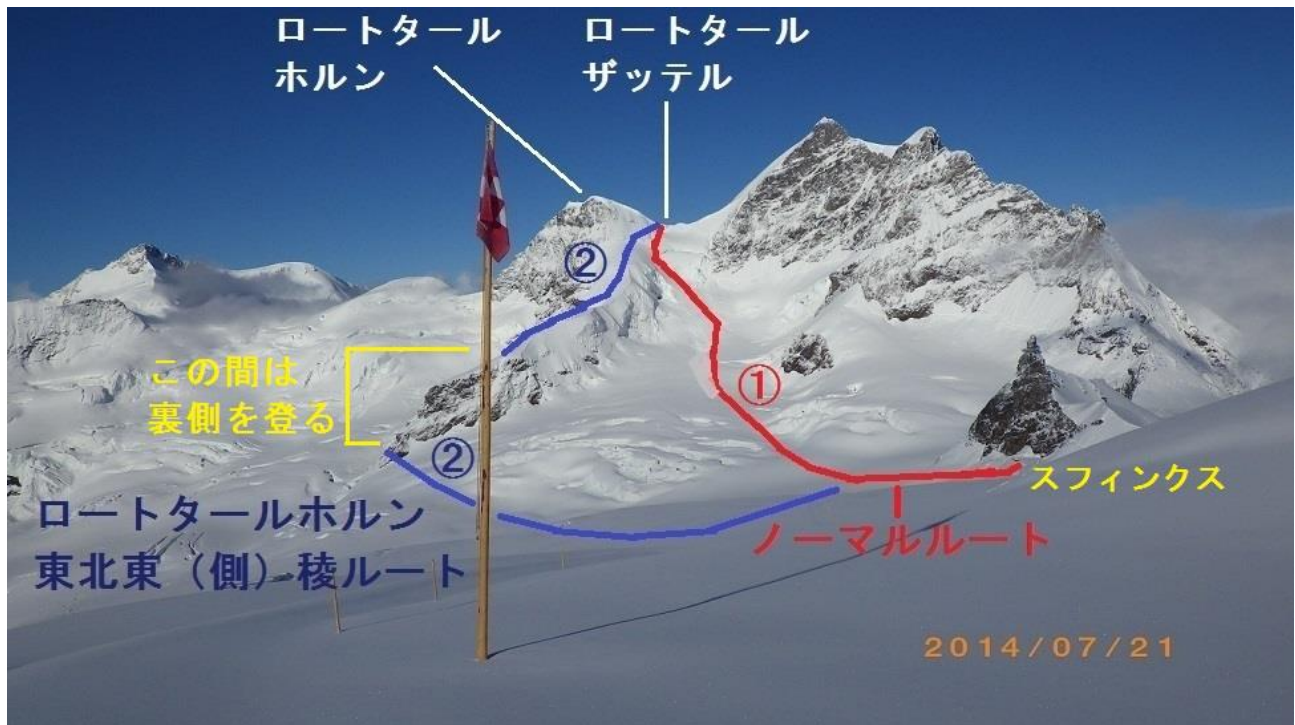
また、アラリンホルンやメンヒの例からすると、1.5倍ではなく2倍の時間を見なければならないであろう。さすれば、往復に16時間が必要で、これに耐えうる体力は毛頭無い。紙の上での計画自体が、先日グリンデルワルトで尋ねた登山センターの現地人ガイドが指摘したように、我々ロートルには気遣い沙汰の計画であったことを、この山を間近に見上げて改めて痛感させられた。せめてユングフラウの肩であるロートタール・ザッテル(3885m、ユングフラウとロートタールホルンの鞍部)まででも登りたいと念じていたが、巨大なクレバスが縦横に走っているザッテル直下の凄まじい雪庇やクレバス、セラックの崩壊跡などを見上げると(下写真の赤丸)、その恐ろしさにその気力も萎えてしまうのであった。



ユングフラウ山頂へのルートは、スイスに出発する大分前から上記のガイドブックやインターネットのホームページで研究していたのでかなり分かってはいたが、一つだけ疑問が残ったのがユングフラウヨッホからロートタール・ザッテルに至るルートであった。

ガイドブックなどによれば、このルートには2本あり、一つはザッテルに直接突き上げるダイレクト

ルート（ノーマルルート）であり、もう一つはロートタールホルンからアレッチ氷河側に派生している小尾根である東北東稜の末端からこの尾根を辿ってロートタールホルンの直下をトラバースしてザッテルに出るという迂回ルートであった。年代が古いガイドブックでは、前者が一般的であるが、夏も遅くなってザッテル直下のクレバスやベルクシュレントが大きく割れだした時は通過できなくなるので、後者の東北東稜経路を採ると記載されていた。しかし、最近の本では、このザッテル直下のクレバスとベルクシュレントは時期にかかわらず荒れているので、東北東稜経路を勧めると記載されている。どうやら最近ではノーマルルートは使われず、専ら東北東稜の迂回ルートがメインになっているらしい。



今ではノーマルルートとなったその迂回ルートが、ユングフラウ・フィルンのどこから東北東稜に取り付き、また東北東稜のどこから稜線に取り付くのか、また稜線の雪のルートはどのようになっているのか等々、ガイドブックでは詳らかに記載されていないルートを実際に現場で確認してみたかったので、ユングフラウ・フィルンを少し下ってクレバスから安全な場所に座って、誰か先行パーティーが登っていないかと目を凝らして見た。

豆粒ほどではあったが3パーティーほどが登っていて、その位置が確認できた。少し煩瑣ではあるが、以下このルートの写真を掲げてこの山を目指す方々のご参考に供したい。



（ロートタールホルン東北東稜。上部には微かにトレースが見える。右奥がロートタールホルン。メンヒから撮影）



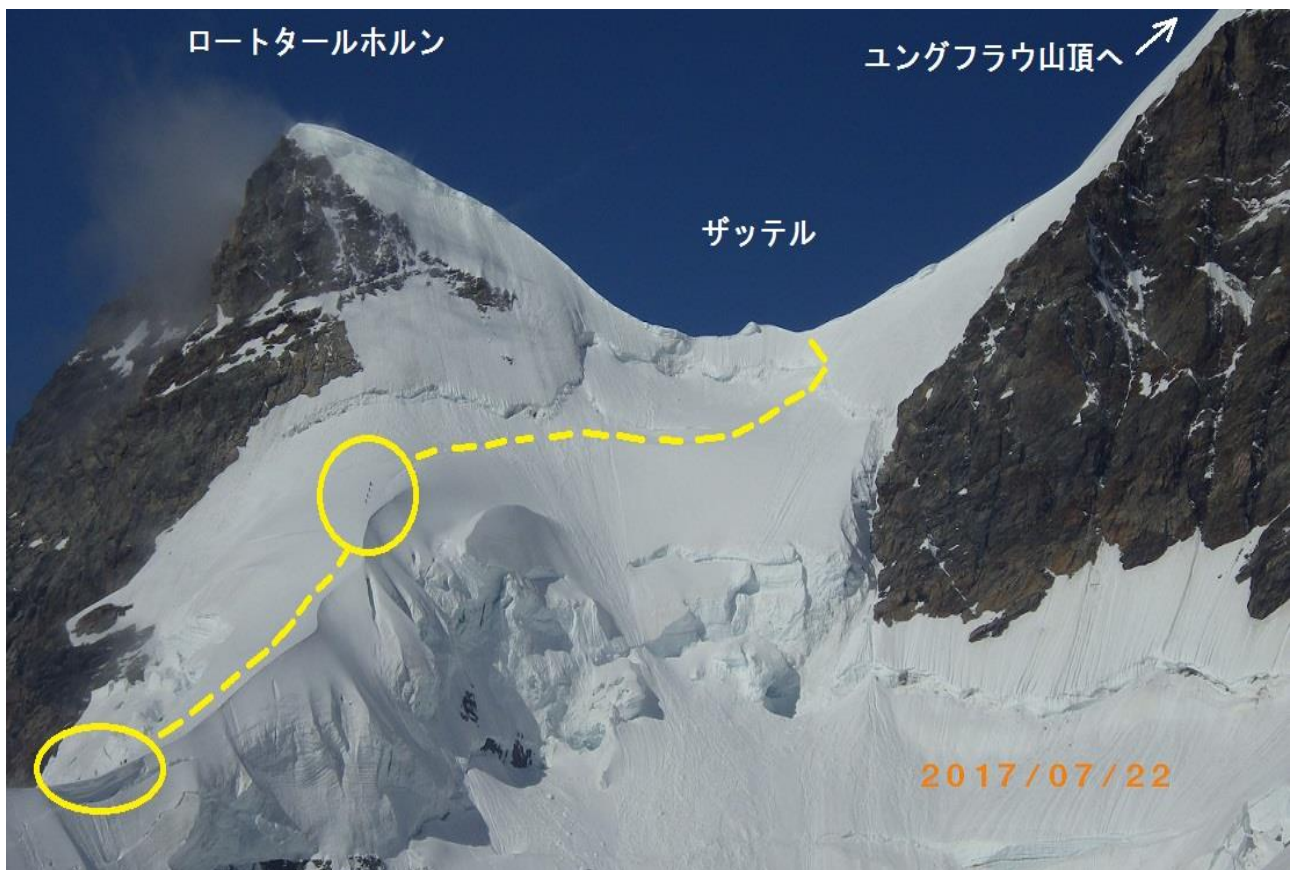
（東北東稜末端の取り付け位置）



（東北東稜上部）



（東北東稜上部拡大。黄色円内にクライマーが見える。彼等はメンヒスヨッホ小屋午前3時半出発組のようだ）



（ロートタールホルン直下・東北東稜上部とザッテル。黄色円内にクライマーが見える。黄色破線はルートを示す）



(ザッテル直下の氷河をザッテルに向かってトラバースするクライマー)



(ユングフラウ・フィレンから見下ろすアレッチ氷河。東北東稜へは写真右のブル道の曲がり角から右に下る。ユングフラウは画面右外の右奥手前。写真右奥の山はグレッチャーホルン、正面左のギザギザはフィエッシャーガベルホルン)

恋焦がれていた“若き貴婦人”は小生の体力では見向きもされず、直ぐ目の前に居ながら袖にされてしまった。今回は山頂付近には始終ガスが掛かっていて、ご尊顔も拝せなかった。マ、“若き”貴婦人が小生の如きロートル爺を相手にしてくれないのは、これは理の当然というものであろう。

アラリンホルンといい、またメンヒといい、標準コースタイムの倍の時間が掛かっているようでは、これはもうどうしようもない。ユングフラウなどは全くもっての外であろう。今回はすっかり落ち込んでしまった。そろそろ潮時だ。潔く「これが最後です」というべき神の啓示であろう。

誠に残念ではあるが、今回をもって海外の高所登山はオシマイとしよう。



（さらば、ユングフラウ。もう再び来ることはなかりう。ユングフラウ・フィルンにて。今年は雪が少なかった）

ユングフラウからの帰途は、アイガーの山麓山腹を歩いてみたかったので、登山電車のアイガー・グレッチャー駅で途中下車してクライネ・シャイデック駅まで約1時間程のハイキングを楽しんだ。

右にアイガー北壁、足下にはクライネ・シャイデックや先日訪れたラウターブルンネン溪谷のミューレンの山里、その上に屹立しているシルトホルンの山々などが眺められて長閑で広大な山岳風景を楽しむことが出来た。

（Jungfrau Eiger Walk の木柱の標識）

（ユングフラウの巻 完）



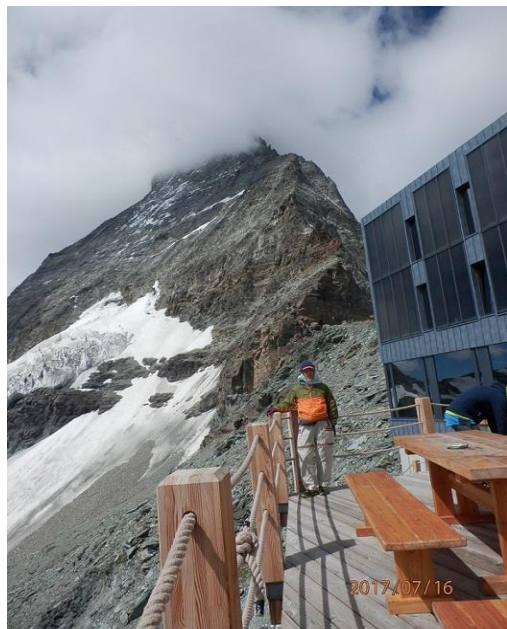
4. マッターホルン・ヘルンリ小屋(3260m)往復 (7月16日)

ここは、アカさんが、若い頃単独で登ったマッターホルンの取付の岩場にもう一度取付いてみたいという希望と、スイスに着いてからの足慣らしを兼ねてハイキングしてきた。3年前に行った時にはヘルンリ小屋は改築中であったが、今回は綺麗な小屋になっていた。ヘルンリ小屋は、ツェルマットからロープウェイでシュヴァルツゼーまで登れば、そこから歩2時間程度で達せられるのでハイキング客で賑わっていた。小屋からは、前回登ったブライトホルン、その先にはモンテ・ローザなども眺められて懐かしかった。顕著に尖った黒い岩頭のクライン・マッターホルン・ロープウェイ駅も目の前に見えた。

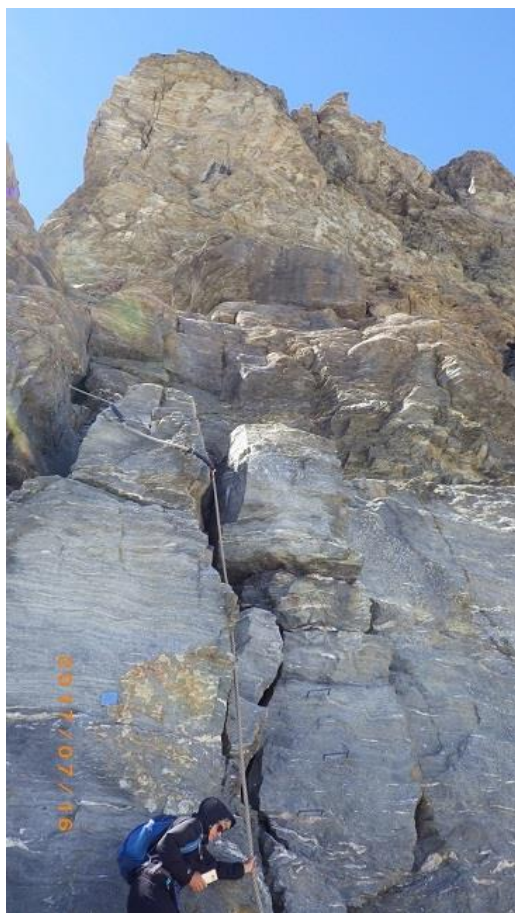
小屋のレストランで昼食にビールを飲んでから、取付の岩場までチョット歩を進めて太いフィックスロープにぶら下がってみたりした。見上げたヘルンリ稜は首が痛いほど真っ直ぐに高く頂上まで突き上げていた。帰途はノーマルルートであるシュワルツゼー経由ではなく、ヘルンリ小屋から少し下った分岐から北側に折れて、ツェルマットの街に流れ込んでいるツムト川上流に下り、シュタッフェル経由でツェルマットまで歩いて帰った。長い道中で足が棒になったが、お蔭様でツェルマット方面から見るマッターホルンの姿とは異なった景色の荒涼とした北壁が目の上に眺められて楽しかった。



(ロープウェイ終点シュヴァルツゼーの少し上、ヒルリ峠からマッターホルンを望む)



上：改築されたヘルンリ小屋。左奥の岩稜がヘルンリ稜の取付の岩場
左：奥がマッターホルン（稜線はヘルンリ稜、壁は南壁）



上：シュタッフェルへ下る途中から見上げたマッターホルン北壁
左下の稜線に小さく見えるのがヘルンリ小屋

左：ヘルンリ稜取付の岩場にフィックスされている太いロープ
女性などの掌では握り切れないほど太い

(マッターホルン・ヘルンリ小屋の巻 完)

5. シルトホルン 2970m 観光 (ベルナーオーバーラント山群) (7月19日)

グリンデルワルトでメンヒ・ユングフラウ行の天気待ちをしている間の1日をこの観光に当てた。相棒のアカさんがかって若き頃夫婦で訪れた思い出の地でもあるそうで、彼の提案である。クライネ・シャイデックからは、峠(クライネは“小”、シャイデックは“峠”の意味)を越えて反対側のラウターブルンネン溪谷に下る山岳鉄道が伸びている。この電車は断崖絶壁をグルグルとジグザグに標高差1300m下ってラウターブルンネン駅に到着、そこからロープウェイに乗り換えまた途中で別の電車に乗り換えてミューレンという山村に着いた。ミューレンという村は、氷河によって削り取られた巨大なU字溪谷の断崖絶壁の上の僅かな猫の額に開かれたリゾート地で、よくもこんな場所にロープウェイのみならず鉄道まで敷設したものと感心させられたが、アイガーの山腹をぶち抜いて一気にトンネルで標高差1400m登るような鉄道を創ったスイスにとっては、このような鉄道の敷設はお茶の子さいさいであろう。(右写真=K. シャイデックからラウターブルンネンに下る山岳鉄道。正面がミューレンの山村)



このラウターブルンネン周辺は、同じベルナーオーバーラント山群でもグリンデルワルトからは“裏街道”に当たっているので、グリンデルワルトのような国際的喧噪がなく、スイスやヨーロッパの人々が静かに旅を楽しんでいるリゾート地であった。ツェルマットもそうであるが、特にグリンデルワルトは日本人と中国人の観光団体でごった返していて、かつての農協ツアーのような何か異様な雰囲気となっている。

ミューレンからはロープウェイに乗ってシルトホルン 2970m まで登れるので、今回は全て乗り物の旅となった。山頂には回転レストラン付の展望台がありビールを飲みながら昼食とした。

(シルトホルン R/W。正面がシルトホルン) ⇒

展望台からは、ラウターブルンネン峪の下流にインターラーケンのブリエンツ湖やトゥーン湖、ラウターブルンネン峪の対岸にはアイガー、メンヒ、ユングフラウなどのベルナーオーバーラントの山々も指呼の内に見えた。



帰途は、ラウターブルンネンから電車でツヴァイリュッチネンに下って、そこからグリンデルワルトに帰った。ツヴァイリュッチネンはインターラーケンから来た電車が、グリンデルワルト方面とラウターブルンネン方面に分かれる分岐点である。“ツヴァイリュッチネン”とは、“二つの谷（の合流点）”という意味で、グリンデルワルト方面へのヴァイス・リュッチネン（白い谷）とラウターブルンネン方面へのシュヴァルツ・リュッチネン（黒い谷）を指す。即ち、チュッゲン／メンリッヘン山塊をグルリと一周したことになる。観光客でごった返しているグリンデルワルトの町と違って、静かな山奥の村歩きができる良いコースであるので、軽ハイキングの軽い1日コースとしてオススメしたい。

以下、道中写真を少しと、後述のグロッセ・シャイデックの位置と併せて関係位置図を掲げておく。

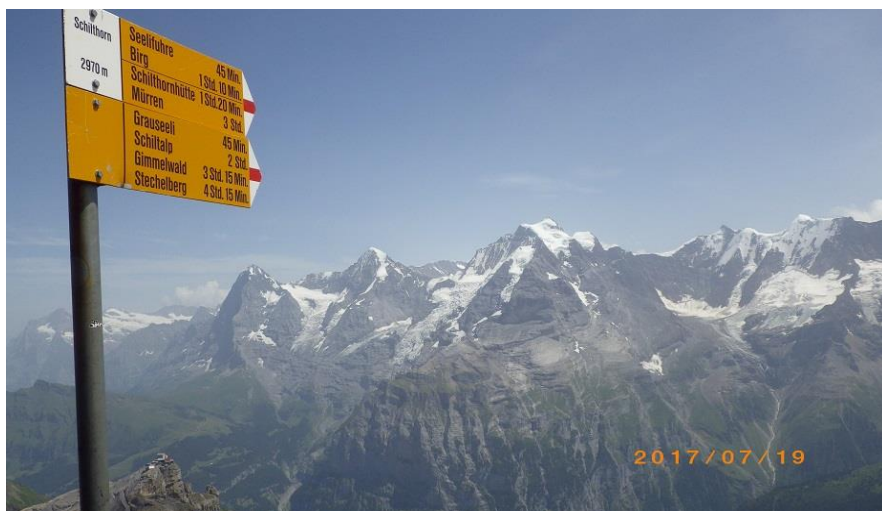


(シルトホルン 山頂展望台)



(同 回転レストラン)

(シルトホルン展望台から対岸の
ベルナーオーバーラントの山々。
左からアイガー、メンヒ、
ユングフラウの3山)





(同上。左奥のワッカから覗くと、アイガー、メンヒをバックに右写真のような趣向となる)



(ベルナーオーバーラント3山、左からアイガー、メンヒ、ユングフラウとシルトホルン・展望台。現地パンフ)



(帰途立ち寄って見たシュタウプバッハの滝、ラウターブルンネン。滝の水流は空中で飛沫となって霧散している)



(シルトホルンの巻 完)

6. グロッセ・シャイデック (7月23日)

現地のパンフレットを拾い読みしていたら、面白そうな場所がでてきた。おまけにグリンデルワルト駅前からグリンデルワルト・バスが出ているではないか。そのような次第で、グリンデルワルトで最後に残った予備日1日をこのハイキングに当てることにした。

グリンデルワルトでシャイデック(=高所の峠)と言えばクライネ・シャイデック(=小峠)が名が通っているが、もう一つのシャイデックはグロッセ・シャイデック(=大峠)と言い、グリンデルワルトの谷をバスで30分程ウネ



(グロッセ・シャイデックへ登るヘアピンカーブ。下方がグリンデルワルト)

ウネと登って行くと、シュヴァルツホルンとヴェッターホルンを結ぶ分水嶺のコルに着く。ここがこのグロッセ・シャイデックで、分水嶺の向こうはメンリングゲンに下るライヘン川溪谷となっている。この地は謂わば、四方を山で囲まれたグリンデルワルト盆地の東側の茶碗の縁である。

この辺りから眺めるアイガー東山稜(ミッテルレギ山稜)やメッテンベルク、ヴェッターホルンの岩稜は、グリンデルワルトの市街地から眺めるのとは趣が違って(方向が違うので)、ギザギザの壮絶な絶壁となっている。特にアイガーの東山稜は、グリンデルワルト方面から眺めると、槇有恒の初登攀が何故あれほど絶賛されたのか分からないくらい“平凡”に見えるが、ここからはよくもマアあんなギザギザの稜線を登れたものだと感心するくらいの絶巔であった。

峠のバス終点には茶店(レストラン)が一軒だけあって、「地球の歩き方」か何かのガイドブックに、朝一番のバスでここに来て朝食を食べながら山々を眺めるのがオススメとかいう文言が載っているらしく、始発バスで日本人観光客4人と一緒になった。その他には誰も乗っていなかった。その内の夫婦連れにはその日の夕方、我々が泊まっていたグルントのキャンプ場の近くで偶々バッタリと再会した。

聞けば、近くのシャレーに1週間ほど滞在しているとのこと。ツアー旅行の団体参加者と違って、手作りの優雅で静かな旅を楽しんでいるようだった。2LDKの部屋で宿泊費は1泊4万円ほどらしい。1泊2000円ほどのキャンプ場に泊まっている我々には羨ましい限り。食事はグリンデルワルトのスーパーで買ってきた食料をキッチンで自炊だそう。経済面でも知性面でも悠々たる人種とお見受けした。



(峠の茶屋とヴェッターホルンの壁。下部は氷河)



(峠の向こうにはこのような山も。柵は牧場囲い)



(ギザギザの荒々しい絶巔に変化したアイガー・ミッテルレギ山稜)

グロッセ・シャイデックの峠からは牧場の中の道を、アイガーやヴェッターホルン、メッテンベルク、シュレックホルンの山々やグリンデルワルトの盆地を眺めながら、フィルス・ロープウェイのボルト駅までブラブラと2時間ほど歩いて、ボルト駅からはロープウェイでグリンデルワルトまで下った。フィルス下駅の近くのグリンデルワルト博物館に寄ってみたが残念ながら博物館は休みであった。



(ハイキング道の様子。全て牧場の中。右側の写真の岩壁はヴェッターホルン。右のギザギザの稜線が90年近く前に浦松佐美太郎が初登攀したヴェッターホルン西山稜である。かつて読んだ彼の著書『たった一人の山』に描かれているその初登攀の時の様子を思い出しながら目で稜線を追ってみた)



(この辺の乳牛は大きい。後方はアイガー)



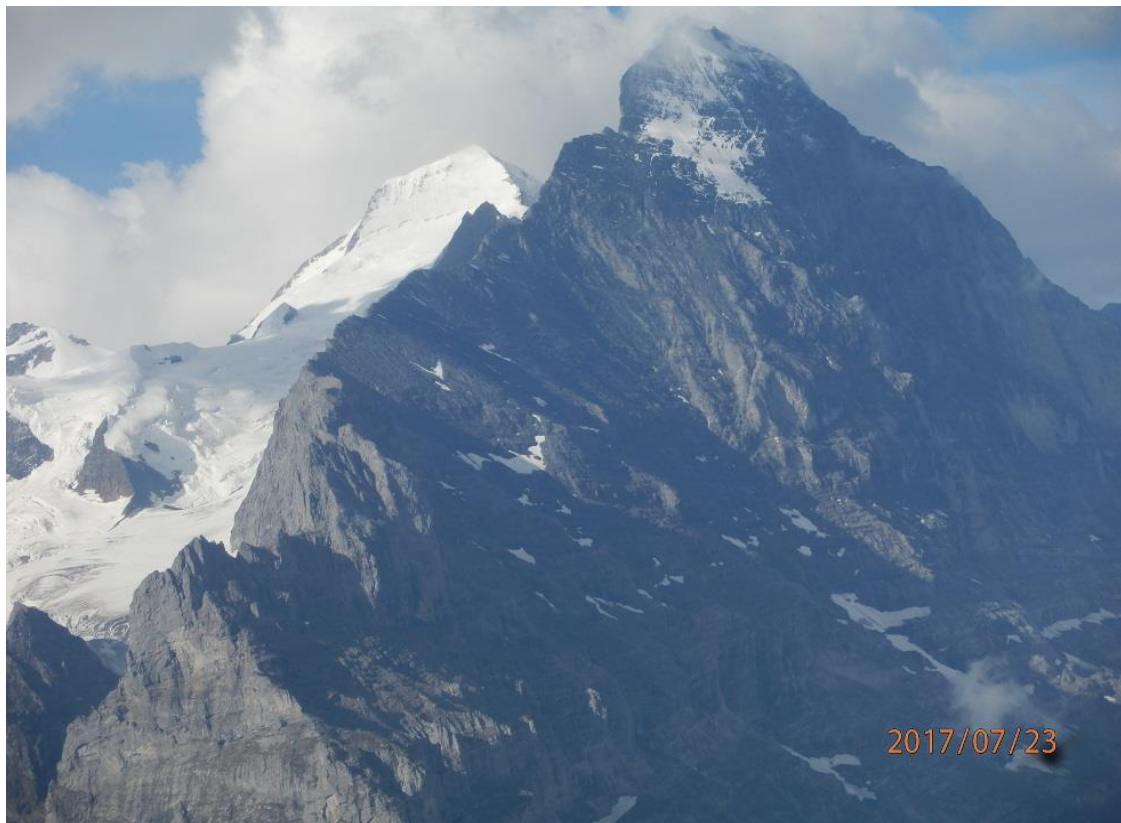
(フィルストへ 50 分、グロッセ・シャイデックへ 40 分)



(牧場の中にあった牛舎・チーズ小屋)



(セルフサービス、チーズ売っています)



(アイガー・ミッテルレギ山稜の横に苦労してリタイアしたメンヒが顔を見せた。メンヒともこれでお別れ)



(フィルスト・ロープウェイでグリンドルワルトに下る。牧場への道路が上部のフィルストまで走っている)

(グロッセ・シャイデックの巻 完)

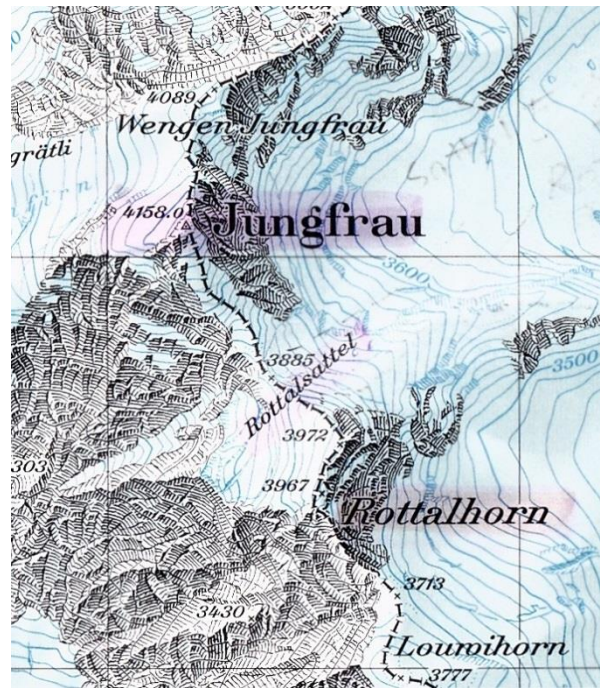
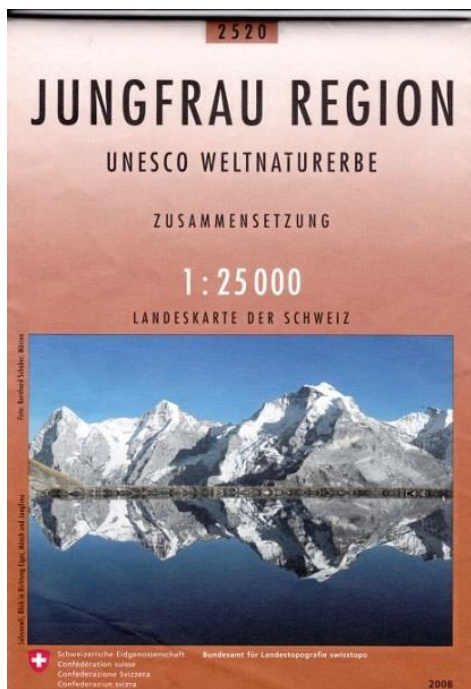
(ご参考)

スイス・アルプスの山旅のチップス (参考情報)

《 1 》 地形図

登山で使える地形図は、なかなか適当な物が見当たらないが、スイス地理院発行のスイス国土地図 (Landeskarte der Schweiz、1/25000) がある。この 1/25000 図には単葉図と集成図があり、単葉図はスイス全土をカバーしている。主要な地域には集成図がある。

- 距離や標高はメートル表示、コンター・ピッチは 20m。
- 多色刷りで鳥瞰図的な陰影が付されているので、山稜などの起伏が分かり易い。
- ハイキングルートは記載されているが、登山道は殆ど記載されていない。
- 山岳地域の主な集成図は、Jungfrau Region (地図番号 2520)、Zermatt-Gornergrat (2515)、Saas-Fee (2526)、Lätschental (2527)、Region Thunersee (2519)、St. Moritz-Bernina (2521)。Zermatt 周辺のヴァリス山群は#2521 を、Grindelwald 周辺のベルナーオーバーラント周辺は #2520 を、またミシャベル山群／アラリン山群は#2526 を参照されたい。
- 価格は、単葉図が CHF14、集成図が同 25 (スイスフラン)。日本では単葉図は殆ど販売されていないが、集成図は東京神田の三省堂などで購入できる。



《 2 》山岳救助保険など

遭難や急病の場合の救助や搬送など、ヘリ救助の保険に入っておくと何かと心強い。

スイスでのヘリ救助や搬送は、下記の2社が行っている。

(1) ツエルマット周辺（ヴァレー地方）を除くスイス全土・・・Swiss Air-Resucue REGA

会費＝年間 CHF30 有効期間＝加入日から年度変わり期日まで（最大1年間、年度更新可）

加入はインターネット申し込み又は現地の郵便局で可能。<http://www.rega.ch/en/home.aspx>

◆REGA はツエルマット周辺・ヴァレー地方での救助活動は行っていないので、この地方での加入は次項の（2）Air Zermatt に別途加入する必要がある。

(2) ツエルマット周辺（ヴァレー地方）・・・Air Zermatt

会費＝年間 CHF35 加入はインターネットでも申し込み出来るが、会費の納入がスイス金融機関の指定口座への振込方法しかないので日本からの振り込みが煩瑣。現地で加入すること。

<https://www.air-zermatt.ch/wordpress/en/>

《 3 》ホテルなど

前回分も併せて、我々が泊まった麓や街のホテルでオススメのホテルを記しておく。

全てインターネットで予約可能。全て英語で可。

●ツエルマット・・・ツエルマット駅前の Hotel Bahnhof

ツエルマット駅歩1分。どこに行くにも便利なロケーション。受付嬢も親切である。共同のキッチン・冷蔵庫・食堂があるので、すぐ近くのスーパーで食材を購入すれば自炊も御の字。

ファミリールームタイプもあり。また、格安のスキーヤーズベッドもあり。

ベランダ付ならベランダからマッターホルンが見える部屋もあり。

バス・トイレ付ツインルームで1泊 CHF140 程度。<http://hotelbahnhof.com/eng/home.htm>

●グリンデルワルト

(1) Hotel Tschuggen Grindelwald

グリンデルワルト駅歩10分。親切。朝食豊富。ファミリールームタイプもあり。

ベランダ付ならアイガー、メッテンベルクやヴェッターホルンが見える部屋もあり。

ツインルームで1泊 CHF150～。<http://www.tschuggen-grindelwald.ch/index.php/de/>

(2) Mountain Hostel Grindelwald

グリンデルワルト駅から登山電車で1駅(5分)のグルント駅歩1分。共同キッチンあり。安いのが取り柄であるが部屋は清潔。ツインルームで1泊CHF98。4人部屋なら1泊CHF156。レストランは駅構内に1軒のみあり。付近には他にはスーパー、レストランなどは無し。

<http://www.mountainhostel.ch/>

●チューリッヒ Hotel Limmathof Zürich

チューリッヒ中央駅から歩5分。交通至便。スイス入出国にチューリッヒ空港を使用する際のホテルとして便利で安価。ツインルームで1泊CHF150程度。 <http://limmathof.com/>

●メンヒの山小屋

ホテルではないが、「メンヒ肩ノ小屋」情報。インターネットで予約可能。電話も通じる。登山電車の終点ユングフラウ・ヨッホ駅から雪道(ブル道)を歩約1時間のメンヒ・ヨッホ(肩)。標高3650m。正式名称はMönchs joch Hütte。寝室はカイク棚。寝具はあり。夕食は18～19時。朝食は早発組は午前3時、遅発組は午前6時。生ビールあり。1泊2食付CHF64。ハイシーズンの好天時は込み合うので要予約。

<http://www.moenchsloch.ch/en> e-mail:info@moenchsloch.ch 電話+41 339 713 472

《4》グリンデルワルトのキャンプ場

高所登山をする場合、一番の問題は天気である。天気待ちをしなければならない時に、その間ズ～ト天候が回復するまでホテルに泊まり続けることは経済的ではないし、またその時だけホテルに泊まろうとしても、ハイシーズンでは飛び込みも不可能である。

この解決策として、今回の我々はメンヒ/ユングフラウ登山の天候待ちをするための予備日程を4日間用意し、この間はグリンデルワルトのキャンプ場に幕営した。スイスにはキャンプ場(オートキャンプ場)が至る所にある(逆に山中ではキャンプ不可)。

グリンデルワルトで規模が大きいものは下記の2箇所(場所は次ページ位置図参照)。

(1) Eiger Nord Wand (アイガー・ノルトヴァント) キャンプ場

グルント駅から歩10分。グリンデルワルト駅からは歩なら30分掛かる。グリンデルワルト駅～グルント駅は乗車時間は5分、料金は片道CHF6。場内にホテル、レストラン、貸ロッジ(固定キャンピングカー利用)もあり。広い牧場風でなかなか結構なキャンプ場。アイガー北壁がすぐ目の前に望める。ビールや簡単なオツマミ料理、パンなどは場内のキオスクで買えるが高価。シャワー、共同冷蔵庫、オートランドリー、談話室、BBQ棟あり。食材はグリンデルワルトのスーパーで買って帰る。共同キッチンは無いので、各自テントで。車無し・マイテント持参で1人1泊CHF18。予約不要。受付のオニイチャンも親切。英語可。

<https://www.eignordwand.ch/index.php?page=home>



(アイガー・ノルトヴァント キャンプ場。後方がアイガー。 右写真の赤いテントが我々が持参したテント)

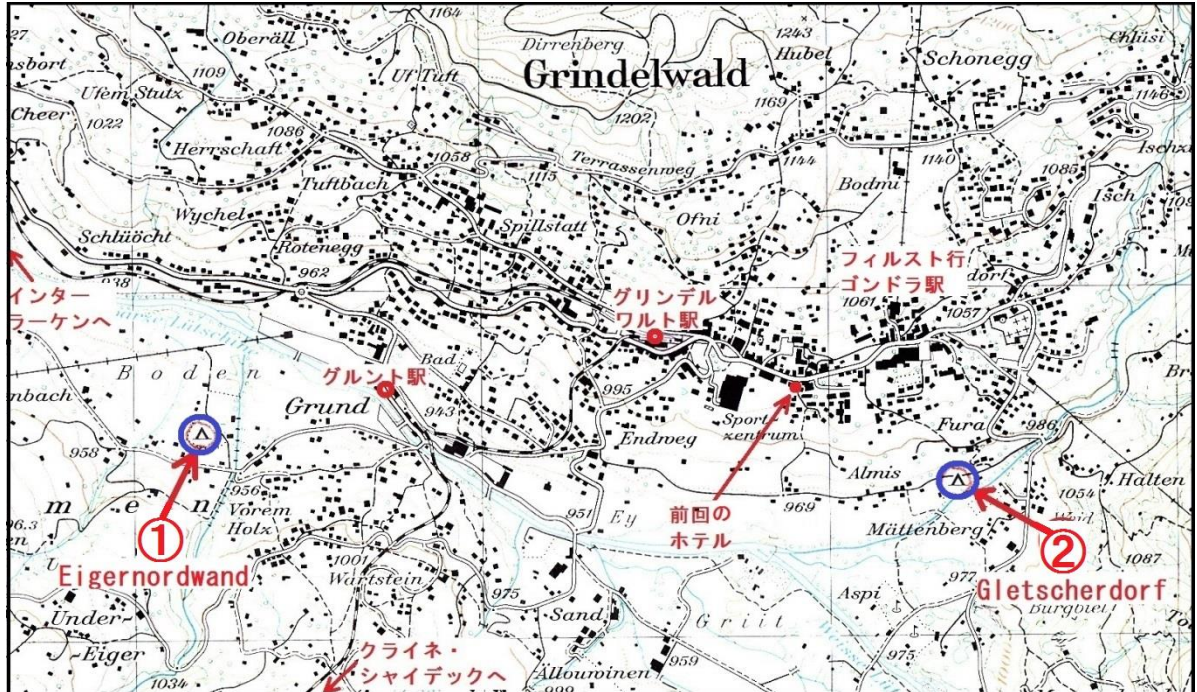
(2) Gletscherdorf キャンプ場

ここは、グリンデルワルト駅から歩ける場所にある。

今回は泊まっていないので詳細は分からないが、価格は(1)と同程度と思われる。

http://www.gletscherdorf.ch/ausgabe_e/index_e.html

【グリンデルワルト キャンプ場位置図】



《 5 》登山情報センター、ツーリスト情報センターなど

●ツェルマット

ツーリスト情報センターは駅前広場（駅構内にある）。

登山情報センター（ガイドセンター）はツェルマットの街 10 分ほど奥に入った右側にある。

●グリンデルワルト

ツーリスト情報センターは駅前のバス広場の奥にある（コープの隣）。

登山情報センター（ガイドセンター）は駅前の左側・モンベルの隣。

《 6 》登山用具店

ツェルマット、グリンデルワルトとも何軒かある。日本のモンベルも出店している。

ただ、登山用具などの種類は少ないので、持参し忘れたギアを補う程度にした方がよい。

ガスカートリッジは、プリムス、EPI があつた。

《 7 》スイス・トラベルパス/スイス・トラベルパス・フレックス

スイスは交通費が高い。スイス国内を公共交通機関で何カ所か移動する場合には、このパスを買っておくと便利である。パスの通用期間内（通用日）は、公共交通機関（鉄道、バス）が乗り放題になり、また多くの山岳鉄道やロープウェイなども 50%（ユングフラウ・ヨッホへの登山電車は 25%）の割引になる。また、その都度切符を買う面倒が無い。

パスの種類には大別して表題の 2 種類があり、前者は通用期間が連続しているもの、後者は一定期間（1 ヶ月間）内で自分が使う日を別々に選択できるものである。

2017 年 7 月現在のパスの価格は下記（次頁）のとおり。

	通用期間 3 日間	同 4 日間	同 8 日間	同 15 日間
スイストラベルパス	CHF 216	CHF 259	CHF 376	CHF 458
〃 フレックス	248	298	420	502

(本稿 完)

[⇒「遥かな山々 私の山旅・海外編」目次に戻る](#)